



しあわせのじゅもん



にし はる

ハート王国の王さまは、こころがホカホカ、あたたかい王さまです。

みんなにこまっていることがあると、いつもすぐにかけて、はなしをきいてくれます。

そして、こまったことがなくなるまではげまし、力をかしてくれるのです。

このあいだも、こんなことがありました。

王さまがけらいをつれてさんぽをしていると、カラスのグーが、トボトボあるいているのにであいました。

「おや、グー、元気がないのう。どうしたんじゃ。」

王さまがやさしくこえをかけると、グーは言いました。

「あ、王さま、こんにちは。

...ぼく、じぶんがいやになっちゃったんです。」

「それはまた、どうして。」

「みてのとおり、ぼくはカラスなのに灰色です。」

そう、グーは、カラスだけど、まっくろではなく、灰色なのです。

「ほかの鳥たちだけじゃなく、カラスのなかまたちにまでバカにされて、ぼく、どうしていいかわからないんです。」

すると、王さまは、グーのかたに手をおいて、言いました。

「そうか、グー。それはかなしいのう。

でもな、グー、灰色はすばらしい色じゃよ。」

そう言うと、王さまは、けらいたちに何か言いました。

しばらくすると、けらいたちは、いろんな色のえのぐをもってきました。赤、青、黄、ピンク、むらさき、オレンジ、茶色、などなど、とにかくたくさん色のえのぐです。

そして、ひとつのパレットにすべてのえのぐを出して、ふででまぜました。

すると、どうでしょう。色はたちまちまざって、きれいな灰色になったのです。

「え！すごいや！ぼくとおなじ灰色だ！」

「そうじゃよ、グー。

灰色は、すべての色をつつみこむ、すてきな色なんじゃよ。」

「王さま、おしえてくれて、ありがとうございます！」

みんなにじまんします。

ぼく、灰色でよかったです！」

「うんうん。よかった、よかった。ほっほっほ。」

王さまは、こまっている人を見つけると、いつもこんなふうに元気づけるのでした。

そんな王さまが、みんな大すきでした。

そして、こころがホカホカの王さまのうわさは、ほかの国にも広まっていきました。

ある日、そんなハート王国の王さまに、スペード王国の王さまからおてがみがとどきました。

そこには、こう書いてありました。

「さいきん、わしのだいじなひめに、元気がないのじゃ。
わけをきいても、なみだをながすばかりで、なにもこたえてくれぬ。
なんとか、力をかしてくれまいか。」

スペード王国のおひめさまといえば、とてもうつくしく、やさしく、あたまもよく、国のみんなにもたいへんな人気ときいていました。

そんなおひめさまに元気がないときいて、気のどくにおもったハート王国の王さまは、なんとか力になりたいとおもって、スペード王国へ行くことにしました。

「そうじゃ、ひめぎみに、なにかおみやげをもっていこう。
なにがいいかのう。」

王さまが、けらいたちにそうだんしてみると、あるひとりのけらいが言いました。
「まちのはずれに、たいへん人気のおかしやがあるそうです。
とにかく、こころのこもったおかしをつくっているそうで、とてもおいしく、たべれば元気がでるとききました。」

「そうか、それはよい！
スペード王国のひめぎみは、あまいものがだいすきじゃそうな。
さっそく、そのみせへ行こう。」

王さまたちは、さっそくそのおかしやさんへ行きました。
おかしやさんは、王さまがとつぜんたずねてきてびっくりしましたが、わけをきいて、おみやげのおかしづくりを、こころよくひきうけました。

そして、おいしそうなハートのかたちのクッキーを4まいやき、ホカホカのホットチョコレートをポットにいれて、言いました。
「わたしが、こころをこめてつくりました。
これをたべれば、きっとおひめさまも、こころをひらいてくれることでしょう。」

王さまは、そのクッキーとホットチョコレートを、さっそくスペード王国へといそぎました。

スペード王国の王さまと女王さまは、ハート王国の王さまがきてくれたのをみて、とてもよろこびました。

「こころがホカホカの王さまなら、きっとひめも、わけをはなしてくれるでしょう。」
そういって、おひめさまのへやへあんないしました。

コン コン

ハート王国の王さまが、ドアをノックすると、中から、かぼそいこえで「どうぞ…」ときこえたので、しずかにドアをあけて、中へはいりました。

すると、うつくしいおひめさまが、いすにすわっていましたが、なみだをポロポロとこぼして

いるではありませんか。

王さまは、テーブルの上に、4まいのクッキーをならべ、カップにホットチョコレートをそそぎました。

「ひめぎみよ、これは、わしのくにで、おいしいとひょうばんのおかしじゃよ。きもちをおちつけて、たべてみてごらん。」

おひめさまは、下をむいていましたが、あまりにもおいしそうなかおりがするので、クッキーを1まい手にとって、ひとくちたべました。

「さあさあ、ホットチョコレートも、おあがり。」

おひめさまは、カップを手にして、ホットチョコレートもひとくちのみました。

すると、ふうっとふかくためいきをついて、

「とても、おいしいです、ハート王国の王さま。」

と言って、はなしはじめました。

「わたし、とてもかなしいんです。」

「いったい、なにがそんなにかなしいのかね？」

「お父さまと、お母さまに、『さいこうのひめ』になるよう、そだてられてきたのに、なれないんです。」

「そんなことはない。

あなたはすばらしいひめぎみじゃよ。

国のみんなからも、あいされておるではないか。」

「でも、でも、わたし、しっばいしてしまったんです。」

「なにをしっばいしたのかね？」

「このししゅうを...」

そういつて、おひめさまは、白い布にぬいこまれたししゅうを見せました。

「ここ、ピンク色の糸じゃないといけなかったのに、まちがって赤色の糸にってしまったんです。

これではさいこうのししゅうになりません。

こんなしっばいをしてしまうなんて、さいこうのひめではありません。

ほんとうは、しっばいなんてしてはいけないのに。」

「どれどれ、見せてごらん。

おお、これは、すばらしいししゅうじゃ。

こんなじょうずなししゅうをやめてしまつては、国民がかなしむぞ。

もうできないなんて、かなしいことを言わずに、またつぎ、あたらしいししゅうをがんばればよいではないか。」

「そうなのでしょうか...。」

おひめさまはそういつて、下をむきました。

そして、しばらくすると、2まいめのクッキーを食べ、ホットチョコレートをのみ、口をひらきました。

「それに、わたし...」

「どうしたんじゃね。」

「お父さまにおこられてしまったんです。」

「おや、それはまたどうして。」

「お父さまとのやくそくのじかんに、すこしおくれてしまっで。」

「そうか、それは、しかたないのう。」

「おこられるようなひめなんて、さいこうのひめじゃありません。

ほんとうは、ほめられることばかりしなくてはいけないのに。」

「そうか、そうか。

『おくれてはいけない』と言われたのなら、つぎ、おくれないように気をつければよいではないか。」

「そうなのでしょうか...。」

おひめさまはそう言って、下をむきました。

そして、しばらくすると、3まいめのクッキーを食べ、ホットチョコレートをのみ、口をひらきました。

「それに、わたし...」

「どうしたんじゃね。」

「国民のひとりにきらわれてしまったんです。」

「それはまた、どうして。」

「おたんじょうびにお花をあげたら、そのお花、きらいだったみたいなんです。」

「そうか、それはざんねんじゃったのう。」

「ひとりでもきらわれるようじゃ、さいこうのひめじゃありません。

ほんとうは、だれにもきらわれてはいけないのに。」

「そうか、そうか。

ひとりのこらずあいしてもらうなんて、むずかしいことじゃ。

それは、わしにもできぬぞ。」

「そうなのでしょうか...。」

おひめさまはそう言って、下をむきました。

そして、しばらくすると、さいごの4まいめのクッキーを食べ、ホットチョコレートをのみ、口をひらきました。

「それに、わたし...」

「どうしたんじゃね。」

「このあいだ、学校の算数のテストで、100点がとれなかったんです。」

「そうか。それはかなしかったのう。」

「100点をとれた人もいたのです。」

ほかの人よりもひくい点数だなんて、さいこうのひめじゃありません。

ほんとうは、だれよりもすぐれていないといけないのに。

わたし、もうだめなんです。」

おひめさまは、わっとなきくずれてしまいました。

「そうか、そうか。」

しかし、ひめは、国語がとくいときいておる。

とくいなものをどんだんのばしていけばよいではないか。」

「そうなのでしょうか...。」

おひめさまはそう言って、なきながら、のこっていたホットチョコレートをのみほしました。

それを見て、ハート王国の王さまは言いました。

「のう、ひめぎみ、父ぎみと母ぎみが言う『さいこうのひめ』とは、どんなひめかのう。」

「それは...、

しっばいせず、おこられることもなく、だれからもあいされて、だれよりもすぐれているひめだとおもいます。」

「そうかのう。」

「え？」

「わしはおもうのじゃが、『さいこうのひめ』とは『さいこうにしあわせなひめ』のことではないじゃろうか。」

「さいこうにしあわせ？」

「そうじゃよ。」

父ぎみと母ぎみは、ひめぎみのことを心からあいしておる。

そんなひめぎみが、いつもなっているようじゃ、さいこうのひめとはいえんじゃろう。」

「それは、そうですが...。」

では、いつもえがおでいればよいのでしょうか。」

「そうじゃの。」

でも、むりやりのえがおではないのじゃよ。

こころからのえがおでなければ、さいこうにしあわせとはいえぬからの。」

「こころからのえがお？」

「そう。」

そんな、こころからのえがおをつくることのできる、じゅもんがあるぞ。」

「え！」

それを、ぜひおしえてください！」

「うむ。それはな、

『ソレデモ・マケナイ！』というじゅもんじゃ。」

「『ソレデモ・マケナイ！』...。」

「そうじゃよ。

しっばいしてもいいんじゃ。

おこられてもいいんじゃ。

きらわれてもいいんじゃ。

人よりすぐれていなくてもいいんじゃ。

なにがあっても、『ソレデモ・マケナイ！』と立ち上がればいいんじゃよ。」

「ソレデモ・マケナイ...。

そうなのですね。

でも...、負けなければよいのでしょうか。

ほんとうは勝たなくてはいけないのではないのでしょうか。」

「うむ。もちろん、勝つことはだいじかもしれぬ。

でもな、いつも勝とうとして、少しのしっばいも、みとめられなくなってしまうのは、ちょっとのことで立ち上がれなくなってしまうものじゃ。

それよりも、なにがあったとしても、なんどでも立ち上がっていくつよさをもったほうが、しあわせじゃ。」

「なんどでも、立ち上がる...。」

「そうじゃよ。

そうすると、かなしいこと、つらいことがあっても、だんだんとおちこまなくなっていく。

そして、やがて『なにがあってもだいじょうぶ』とおもえるようになるんじゃよ。

そうすると、しぜんとえがおになれるんじゃ。」

「まあ...、そうなのですね！」

「そうじゃよ。

これからもいろんなことがあるじゃろう。

そんなとき、なにがあってもうけとめて、じぶんに負けないこと。

それが、さいこうのえがおになれる、さいこうのしあわせじゃないかと、わしはおもうのじゃ。

」

はなしを聞いていたおひめさまの目が、キラキラとかがやきはじめました。

「そう、そのかおじゃよ。

その目をしておれば、ひめぎみはいつでも、さいこうじゃ！」

おひめさまは、なみだをふき、えがおをうかべました。

「ハート王国の王さま、ありがとうございます！」

わたし、いままでとてもくるしかったのに、とっても気がらくになりました。」

「そうか、そうか。それはよかった。

ほんとうによかった。」

ハート王国の王さまと、おひめさまが、ニコニコしながらへやから出てきたのを見て、スペード王国の王さまと女王さまは、手をとりあってよろこびました。

「お父さま、お母さま、しんぱいをかけてしまって、ごめんなさい。

わたし、もうだいじょうぶです。」

そう言ったおひめさまのかおはかがやいて、今までよりもいっそううつくしく見えました。

スペード王国の王さまと女王さまは、

「なにかおれいを…」

と、ハート王国の王さまに言いましたが、

「おれいなど、なにもいらぬよ。

ただ、ひめぎみのえがおを、年にいちど、見せにきてくれると、うれしいのう。

ほっほっほ。」

と言って、けらいたちとともに、ハート王国へとかえっていきました。

その後、こころから、えがおになれるようになったおひめさまは、スペード王国のみんなに、ますますあいされたのでした。